

被服製作実習における授業プロンプトの有効性の検討

— 浴衣製作実習における学生の記述分析を通して —

長崎大学教育学部 鈴木 明子

本研究では、浴衣製作実習において教師が提示した各授業プロンプトの有効性を検討することを目的としている。12回の実習授業で、浴衣製作活動における学びを促すために教師によって提示された授業プロンプトの意味を学習者がどのようにとらえたか、その中で何を学んだかを28名の大学生の記述から分析した。その結果、多くの学生は教師が提示した授業プロンプトから教授意図を理解し、それらを主体的かつ詳細にとらえ直していた。学生が記述した学びの内容は、各種縫製技能や身体構造と被服構成などの実質的な事柄の他、段取りの工夫や危険の回避など生活に必要な力も含まれていた。また繰り返し作業と繰り返しのない難易度の高い作業のいずれにおいても、自己の内面的な変化への気づきや素材および道具、技能と自分との関係性をみつける記述がみられた。

キーワード：浴衣、製作実習、学び、関係性、授業プロンプト

1. 問題および目的

産業構造の変化により生活様式が大きく変わるに伴って、家庭科における被服製作活動の実用上の価値は薄れてきている。また心身陶冶上の価値も教科観の変遷に伴いそれを家庭科で展開することの評価が曖昧となったまま現在に至っている。各々の教育場面による被服製作活動の目的に応じて、縫製教材の特性を検討することが必要であり、その指導方法も改めて検討しなければならない状況にある¹⁾。

本報告においては、縫製教材のひとつとして平面構成衣服である単衣長着（浴衣）を取り上げた。浴衣は、我が国の長い歴史の中で日常的に着用されてきた伝統的な和服の原型でありながら、現代の衣生活では特別な時にしか着用しない非日常的な衣服となっている。しかしながら、日本の夏の行事ではは着として着用されており、それを着用した時の日常と異なる自分を想像することにより、自分の手でつくることへの強い動機づけが生じやすい教材といえる。また生活経験の少なさや手の巧緻性の低下などから、道具や布の扱いに不慣れた初心者にとって、所要時間はかかるが、一連の基礎的縫製技能を経験することができる教材でもある²⁾。これらの特性より、浴衣は今なお家庭科

の縫製教材としての価値が高い衣服と考えられる。

佐藤は、具体的な道具や素材および人と出会う活動的で協同的な「学び」の必要性を主張する。そしてこのような学習の実践は、教育内容と自分自身との関わり、未知と既知との関わり、知識間の意味の関係を構成するとしている³⁾。被服製作活動においても、学習者がこのような意味のある学びを享受できるような指導の工夫が必要である。伊波は、浴衣製作における認知過程の分析をもとに学習者の学びの実態を明らかにし、知識（技術）や手続きの意味を問う授業や実習を試行している⁴⁾。本研究でも同様に、改めて定義されたこのような学習（学び）が展開される場として被服製作活動をとらえるが、伊波が家庭科教育における学習者の認知過程を分析することに焦点を置いているのに対し、本論文では、授業プロンプトの提示という教授方法を考案し、実習授業において学習者の学びに有効に作用するか否かを検討することを目的とした。授業プロンプトとは、各授業の学びを方向づける教師のメッセージである。プロンプトということばは、現在、障害児教育において、オペラント条件づけの原理に基づく行動分析および行動形成の領域で用いられることが多い⁵⁾⁶⁾。それらは、言語指示などの音声プロンプトや文字およびモデル提示などの視覚的プロンプ

トによって、生活行動や技能を獲得、形成するための条件やプログラムを検討しようとするものである。一方、教師から学習者に流れるメッセージの伝達を分析する際の要素のひとつとしてもとらえられている⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。これらの研究においては、プロンプトについて、“言語的な手がかり”、“手がかりとなる質問”、“反応の督促”、“子どもの思考や活動を促す刺激”といった教師から学習者へのメッセージという用い方がなされている。本研究では授業内の細かい刺激ではなく、各授業毎に提示する授業プロンプトを“授業内容に対応する学びを促すことを意図したことば”と定義して使用することとする。

学習者は被服製作実習における作業の過程で、知識および技術の意味、手続きさらにその背景について多様な思いをめぐらせ、気づいていなかったことに気づいたり、疑問をもったり、納得したりといった思考活動を行っていると思われる。ひとつの課題に長時間向き合う過程における分断された各授業の作業の中で、学習者と教師がともに同じ授業プロンプトを意識することによって、学習者の思考活動を促進するとともに教師がそれを確認することもできるのではないかと考えた。

そこで本研究では、浴衣製作実習の各段階（授業）において、教師が学びを促すことば（授業プロンプト）を提示するという教授方法によって学習者が授業プロンプトの意味をどのようにとらえるか、その中で何を学んだと認識するかを分析し、その教授方法の有効性を検討することとした。

2. 方法

大学3年生28名（男子2名、女子26名）を対象に、「浴衣」を教材とする被服構成実習を行った（授業者：鈴木、2000および2001年各々4～7月実施）。90分12回の実習授業の内容と、教師が提示した各授業プロンプトを表1に示す。多様な製作方法や工程順序が考えられるが、学習者にとって製作経験のない、また比較的難易度の高い教材を、できる限り合理的に限られた時間内に完成できるように配慮した。また各工程毎に、学習者の関心や意欲のもち方あるいは理解のしにくさや技術の難易度を予測し、全工程を通じて完成までに学

表1 被服構成実習授業内容および教師が提示した授業プロンプト

回数	授業内容	教師が提示したプロンプト
1	目視、注意事項	夏祭りには浴(女)に浴衣姿を見せるぞ!
2	和服概要と寸法(寸法表提出、表裏しるしつけ、一反の長さ・幅・残布確認)	浴衣の構造って?
3	身頃裁断、肩縫い	ハサミがこわい・針がうらめしい・・・
4	しるしつけ	困員への挑戦・ここはどこ、私はだれ・・・
5	縫り越し補け、肩当て、居敷当て	意味あるの?
6	脇縫い、脇縫い縫い代始末	耳くげが好きになった・・・
7	衽裁断、衽しるしつけ、衽下くげ	柄合わせをもう一度! 染めの技術ってすごい!
8	衽つけ、衽つけ縫い代始末	衽の役割・・・身体を覆うということ
9	本衽裁断、本衽しるしつけ、本衽つけ	唯一の立体構成
10	衽先始末、本衽くげ	留めて知恵の輪?
11	掛衽裁断、掛衽しるしつけ、掛衽脇縫い、掛衽くげ	掛衽の立場
12	袖裁断、袖しるしつけ、袖口くげ	和服の合理性と先人の知恵
13	袖口下、袖下縫い、丸みの始末	
14	袖つけ、ふり・袖つけ縫い代始末	
15	裾くげ、仕上げ	
16	着付け	

(分析対象授業は1から12)

んでほしいと考えたいいくつかの事柄（教師の意図した目標）を設定した。そしてその習得を促進し、注意を喚起することばを授業プロンプトとして表現し、最も効果的と思われる授業において示した。各授業の開始時に授業プロンプトを記載した文字カードを読み上げながら黒板に貼り、「今日はこのことについて考えながら作業をしてみよう」と提案する形で示した。13～16回はプロンプトは提示せず分析対象から除外した。

表2に、提示した各授業プロンプトに対応する教師の教授意図を示す。どの授業プロンプトも、各々の作業や工程の大切さに気づくことによって、作業に意欲と見通しをもたせ、関連の内容についての理解を深め、個々の学習者の興味に応じて多様な学びにつながるよう表現の工夫を行った。また各々の作業を的確に進めながら、既に学習したこととの関連性を追求したり、反復学習であることを意識させている部分もある。例えば、授業8「衽つけなど」の作業工程における授業プロンプトは「衽の役割…身体を覆うということ」とした。その意図は「衽の存在によって初めて身体を覆うことができる構造になり、衽をつけることが可能になることに気づき、衽の大切さと和服の構造をさらに理解し、並幅の反物で衣服をつくるための工夫を追求させる」であった。授業者は、これら

表2 提示した授業プロンプトに対応する教師の意図は
教師が特に注目した部分

題	教師の意図
1	自分なりの目標と計画性をもって、楽しく意欲的に多様な意図を感じながら教材に取り組み構えをつくらせる。
2	和服の構造や機能性を理解することによって我が国の文化に興味をもち、男物と女物の違いにも注目しながら、製作過程における注意点を気づき、作業の見通しをたてさせる。
3	慣れない道具や反物の扱いおよび危険を伴う作業に対して、適度な緊張を感じながら、道具に興味をもって正しい対応を学び不安や恐怖を克服してほしい。
4	構造や名称を復習し、自分の体型が袖が浴衣どの部位に生かされるのか確認し、どこどこを縫い合わせるのか見通しを立て、へらの使い方を習得しつつ正確に縫い付けを行わせる。
5	ひとつひとつの作業の意味や関連を考え、全工程の中で、現在行っている作業がどのように位置づけられ、その効果がどのように生かされるのか追求し意図を感じてほしい。
6	耳ぐけは慣れないと縫いにくい方であり、最も作業量が多く単純な繰り返し作業の工程であるが、針の扱いに慣れるとともに大切な作業であることに気づき、形づくられていく喜びを感じてほしい。
7	2度目の納合わせで今回は友人の柄を模写するゆとりもあるだろう、多様な生地、色柄を観察して、その特徴と良さを感じ、縫い方や縫い方に興味をもって探究する姿勢をもたせる。
8	柱の存在によって初めて身体を覆うことができる構造になり、袴をつけることが可能な状態になることに気づき、柱の大切さと和服の構造をさらに理解し、並縫いの反物で衣服をつくるための工夫を追求させる。
9	浴衣づくりの全工程の中でも最も難しいと思われる袴つけの方法を理解し、異なる形状の縁を縫い合わせる工夫を知り、立体的な構造の袴の意図を追求しながら丁寧に作業を行わせる。
10	非常に複雑な袴先留めの作業は、ひとつひとつの工程に意味があり順序性があることを理解し、正確に美しく興味をもって取り組ませる。
11	和服の構造の中で中袴はどのような意味をもつか追求し、日常着としての昔の人たちの衣生活管理や豊かに着こなす工夫に思いを馳せて、完成に近い充実感と作業の意図を感じてほしい。
12	今回の作業のみではなく、これまでの全ての工程を通して、様々な和服の合理性と先人の知恵や工夫をとらえ、自分の現在の日常生活に生かすことができることを追求させる。

-----は教師が特に注目した部分

の意図を直接伝えることはせず、作業の説明をする中で各々の授業プロンプトを意識して実習を行うよう促した。波線部分は特に注目した箇所である。授業1から12の各授業の課題作業終了後、各々の学習者に、「1. 各授業プロンプトは何を意味するか」「2. その授業プロンプトをみて何を学ぼうとしたか」「3. この授業時間の浴衣製作活動および縫製作業を通して学んだこと」を自由に記述させた。それら3つの記述内容を授業者が読みとり、分析および考察を行った。

3. 結果および考察

(1) 授業プロンプトの意味についての記述

「授業プロンプトの意味」についての記述を、12回の各授業別に、「教師の意図の把握」「具体的とらえ直し」「問題意識の発現」「主体的関与」の4つの観点から分析した。表現は異なっているが、同様の意味を示す記述をしている場合は、「教師の教授意図と同様の把握をしている」ととらえた。また自分のことばで授業プロンプトを説明できていると判断できる場合「具体的とらえ直し」を行っているとした。授業プロンプトにかかわる問題意識を記述している場合、「問題意識の発現」とと

らえ、さらにそれを自分の課題として解決していこうとする記述がみられた場合、「主体的関与」があるとした。

28名ひとりひとりの学習者の12回の授業プロンプトに対する記述を分析し、先の4つの観点からの反応の有無を一覧として表3に示した。●が4つ付いている枠は、一人の学習者が一つの授業プロンプトに対する記述の中で、授業プロンプトを的確に把握し、具体的にとらえ直し、問題意識をもち、主体的関与をみせたということを示している。●が多い者は比較的、作業を効率的にゆとりをもって進めており、少ない者は逆に失敗を重ねてゆとりがなくなっている傾向がみられた。しかしながら、少ない者も、12回の授業のどこかで、「問題意識の発現」や「主体的関与」を見せていた。

課題とする工程数が多く困難な作業を含む5（繰り越し揚げ、肩当て、居敷当て）、

9（本衿裁断、本衿しるしつけ、本衿つけ）の授業は、縫い方や方法を理解するにとどまり、教師の考える授業の意図を具体的にとらえ直すまでには至らなかったと思われる。

学習者の授業プロンプトの具体的とらえ直しの一例を各授業毎に表4に示す。各授業における意図を把握していても、12回とも各学習者の視点には差異があり、多様な方向に関心が向いていることが読みとれた。例えば、授業1（目標、注意事項）の授業プロンプト「夏祭りには彼（彼女）に浴衣姿を見せるぞ！」では、学生Mは「ものを作る楽しみには完成させる楽しみと何か他の目的をもつ楽しみがある。技術の習得はもちろん、作る喜びも味わい、教師の立場で多様な意義を伝えられるようにしたい」と、教師としての視点がみられる記述をしていた。また学生Uは「誰に見せてもいいように納得のいくよう、心をこめて完成させる。その浴衣に負けないよう自分の内面も磨く」と浴衣を着装した自分を見つめる視点で記述していた。

授業3（身頃裁断、背縫い）の授業プロンプト「ハサミがこわい・針がうらめしい…」では、学生Jは「日頃、ハサミで布を裁つことや針を使うことが少ないと思う。使い慣れないので、危険に

表3 各学習者の授業プロンプトに対する反応（把握・とらえ直し・問題意識・主体的関与）の有無

実施年	学習者	1. 裏は女ませせ	2. 裏は女ませせ	3. ハコがめ	4. 裏は女ませせ	5. 裏は女ませせ	6. 裏は女ませせ	7. 裏は女ませせ	8. 裏は女ませせ	9. 裏は女ませせ	10. 裏は女ませせ	11. 裏は女ませせ	12. 裏は女ませせ	合計
H13	A	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	17
	B	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	13
	C	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	32
	D	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	7
	E	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	24
	F	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23
	G	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23
	H	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	22
	I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	20
	J	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23
	K	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23
	L	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18
	M	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	25
	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	22
H12	O	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18
	P	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
	Q	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
	R	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	21
	S	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
	T	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
	U	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	21
	V	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	15
	W	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	20
	X	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23
	Y	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	20
	Z	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	16
	AA	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	12
	BB	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18

(●)は各セル内の左から各授業プロンプトに対する「把握」「とらえ直し」「問題意識」「主体的関与」の各反応があったことを示す。欠は欠席者)

表4 学習者の授業プロンプトの具体的なとらえ直し(例)

種	学習者の授業目標の具体的なとらえ直しの例
1	ものを着る楽しみには完成させる楽しみと何か他の目的をもつ楽しみ(誰かに見てもらいたい、誰かにプレゼントしたい等)がある。技術の習得はもう作る喜びも味わい、教師の立場で多様な意見を伝えられるようにしたい。(9)
2	洋服との違い、役割、機能を考え、どのようなパーツがあるのか知る。構造を知ることによって、製作の見通しがつき、やる気や興味をさそふ。(4)
3	初めての和裁は緊張と不安がある。慣れない縫い方や反物の扱いにくさに苦労するということを示しているが、だからこそ克服し努力してやりがいもある。(2)
4	反物に縫いづらく苦労した。各部位の線の意味を考えながらつけなければならぬことを示している。(1)
5	自分が何をやっているか、なぜやっているかを考えながらやろうという意味。私自身は意味を考へるゆとりはなく、楽しく正確に作業を行うことに一生懸命だった。(8)
6	耳だけの部分はかなり多いので、方法を把握して好きになってほしい。またはたくさんの耳だけをやっていくうちに上手くなり、好きになるだろう。(4)
7	2回目の柄合わせで今度は上手くいくのかなと思いがちだったが、最初おバツとしない柄ばかりだったが、袖1枚分とると、ぴったり柄合わせができた。たった一反の限られた面積できれいに合わせられる布の柄の配列に感動した。(8)
8	もし死がなくて身頃だけだったら身体を全部覆うことはできない。狂の微妙な形があることによって、身体をきれいに覆い、余りも出ないようにしている。ここに衣服としての役割がある。(4)
9	浴衣は平面構成だが、ある部分だけ立体構成になっている。どこなのだろう?と疑問に思っていたが、身頃に木綿をつけるためにまち針をうった時、「ああなるほど。持って立体的なんだ!」と理解できた。これまでも縫いかけたが、今回がフランスとのが一番縫いかけたと思う。つらいように何度もまち針を打ち直した。(8)
10	習めの作業は混乱してしまうが、ひとつひとつの作業には確実に意味があり、ちゃんと完成する。知恵の輪のように苦戦しながらもひとつひとつの作業を考え順序性をもってきちんと仕上げなければならない。(8)
11	袷の役割は、まず見た目の美しさ(左袷の柄をよくみえる)と汚れや傷み(首の部分は汗をかき臭い)に耐えることである。(1)
12	今まで浴衣をつくってき考えるべきことは、先人が考え出した知恵や技術である。縫う場所によって縫い方、針目の大きさ、きせのかけ方が異なる。袷、居敷当等も先人の発想のもとに生まれたものであり、合理的なものにどんどん変化し受け継がれてきたのだと感心した。(2)

()内は学習者

注意して、慎重に布を裁ち、針を使おうという意味である」と記述し、ハサミや針という道具の使い方に注目している。一方で学生Eは「初めての

和裁は緊張と不安がある。慣れない縫い方や反物の扱いにくさに苦労するということを示しているが、だからこそ克服してやりがいもある」と記述し、慣れない和裁作業全体の象徴としてハサミや針の扱いをとらえている。これらの例にみられるように、ひとりひとりの記述は、授業プロンプトをみる観点が異なっていたり、注目する対象に違いがみられるなど多様であった。

さらに、授業4(しるしつけ)では、授業プロンプト「困難への挑戦・ここはどこ、私はだれ…」により、改めて「問題意識」をもち、「主体的関与」をみせた者もみられた。例えば、「ただ言われたとおりにするしをつけるのではなく、この部分は浴衣になった時に見える部分だから、しるしが

ついてはだめなんだなどと考えなければならぬことを示している」(学生H)、「どうしてここは2cmなんだろうとか、どうして斜めになるのだろうとか、どうしてだらけになりました。その後、言われたとおりにこなせばいいという感覚になりましたが、できた後は浴衣

の形がみえてきて楽しくなってきたので、どうして？というところの答えを自分で納得できるようになればもっと楽しくなるのだと思います」(学生K)などの記述である。

授業9(本衿裁断, 本衿しるしつけ, 本衿つけ)では, 授業プロンプト「唯一の立体構成」に促され, 「浴衣は平面構成だが, ある部分だけは立体構成になっている。どこなのだろう?と疑問に思っていたが, 身頃に本衿をつけるためにまち針をうった時, ああなるほど, 衿って立体なんだと理解できた。つらないように, 何度もまち針をうち直した」(学生D)といった「問題意識の発現」ととらえられる記述をした者が多くみられた。

(2) 授業プロンプトをみて学ぼうとした事柄

学習者が授業プロンプトをみて学ぼうとした事柄は, 「和服の構成・機能」「技能」「染織」「縫い目」「着装」「文化」という項目に分けることができた。授業内容によって偏りはあるものの, 複数の授業で, 各々の授業内容を意識していることが明らかになった。特に, 「構成・機能」と「技能」については, 毎回多くの者が異なる視点からとらえており, 当該の授業目標ばかりでなく, 前回までの目標が持続的に意識されていることも明らかになった。例えば, 授業5(繰り越し揚げ, 肩当て, 居敷当て)では, 繰り越し揚げなどの作業を行いながら, その必要性について理解しようと努めると同時に, 「ここは表に出るから気をつけて縫おうなどという考えにまだ及ばず, 縫うので精一杯の時がある。もう一度浴衣の構成について理解し直す必要があると思った」(学生E)という記述などにそれがうかがえる。授業8(衿つけ, 衿つけ縫い代始末)でも, 教師が意図したとおり, 衿の存在を意識することによって, 和服の構造を改めて理解しようとしたという記述が多かった。

ここで, 学ぼうとした事柄のうち, 「和服の構成・機能」と「技能」についての記述が, 授業によってどのように多様な表現であったか, 全員の記述の中から例をあげ, 表5-1と表5-2に示した。表5-1「和服の構成・機能」については, 11回の授業でこの内容に関する記述が見られた。各回の授業内容に応じて, 視点を変えた表現がみ

られた。表5-2「技能」については, 12回すべての授業でこの内容に関する記述が見られた。「構成・機能」についての記述と比較すると, 各回の授業課題の製作手法そのものに関する記述が多かったものの, 授業10では, 「順序性, コツをつかむ」という記述もみられ, 「技術」習得へのプロセスを主体的かつ具体的にとらえる者の存在が明らかになった。

これらの記述が示す「学ぼうとした事柄」のすべてが, 授業プロンプトを意識することによって生じた思いであるとは言えないであろう。しかしながら, 教師が作業課題のみを授業目標として示したり, 作業方法の説明に終始するというような

表5-1 学習者が授業プロンプトから学ぼうとした事柄の記述
「和服の構成・機能」について(例)

番号	学習者の「和服の構成・機能」に関する記述
1	浴衣の構造を学ぶ。
2	一枚の浴衣の部分と構造の関係を理解する。衿や掛など和服の神髄。洋服は曲線で構成されている部分が多いが, 和服は長方形をつなぎ合わせた状態。男物と女物。
3	反物は長さが決まっている。布の使用量もぎりぎり。
4	どの部位でどのようなかたちになるのか。どの寸法がどこのしるしになるのか。後ろ身頃 前身頃。
5	肩当てや内揚げの必要性。意味。きせの分量。縫う場所。縫い代の向き。
6	縫う長さ。浴衣らしいきれいな形。
7	左衿は身頃と同様に。衿は浴衣の顔。バランスよく美しく仕上げ。衿の役割。一番よく見える部分。
8	衿は身頃と衿をつなげ・・・。衿の微妙な形。
9	立体的な部分。曲線を縫う。部分的に立体。
10	—
11	掛衿の役割。意味。
12	布使いにムダがない。袖の下に身八つ口。1.2mの1枚の布から。平面的な布を立体的な人間が着る。

表5-2 学習者が授業プロンプトから学ぼうとした事柄の記述
「技能」について(例)

番号	学習者の「技能」に関する記述
1	きちんとていねいに作る。いっしょけんめいに作る。計画的に進める。技術の習得。理解してつくる。手順よくつくる。楽しんでつくる。
2	作業の位置づけ。製作手法の把握。どのような形のものをつくるのか考える。
3	正しいフォームの運動で針を動かせるようになる。練習あるのみ。これを乗り越えなければならない。
4	へらでしるしをつけるのは難しい。微妙なズレを気にする。一寸のくるいもなく・・・。
5	十字とI字のしるしの違いは何なのか。場所によって縫い方が違う。
6	縫い方。
7	柄合わせ。染め方。
8	しっかりと縫っておかないと・・・。よりにていねいに縫おう。縫い目を気にかけた。
9	布を曲げる。つらないように気をつけながら・・・。立体的に縫う。
10	針を入れる方向。糸を巧みに使って布を返す。ひとつひとつの作業の意味。順序性。コツをつかむ。
11	見た目の美しさ。確認。
12	縫い目の大きさ

実習では、学習者がこのように多くの事柄を意識する授業にはなりにくいものと思われる。毎回の授業で異なる授業プロンプトを意識しながら作業を行うことによって、教師の教授意図に含まれる概念のいくつか、具体的あるいは抽象的な形で学習者の学びに反映していることが確認できた。また毎回授業プロンプトを提示し作業後の記述を課すこの教授方法によって、教師は授業成果を確認する上で有効な情報を得られるということも明らかとなった。

(3) 浴衣製作活動および縫製作業を通して学んだこと

学習者が浴衣製作活動や縫製作業を通して学んだと記述した内容には、「身体構造や衣服の構成」「着装」「布・衣服の柄」「縫製の原理・縫い目」「各種技能」への関心、興味、理解といった浴衣という被服製作教材に含まれる実質的な対文化的な事柄の学びと、「生活の見直し・文化の再認識」「消費者としての興味・行動」「性格・性別に関する認識」「達成感の感受」「計画性・危険の回避」「集中力の高まり」「協調性」といった、対自己的な学びとしてとらえられる事柄がみられた。

さらに、学習者が学んだと記述した内容に見られる「自分との関わり」について分析したところ、特に「技能」を通して自分を見つめたり、自分に気づく記述が多く見られた。例えば、「最初は、ちゃんとしたフォームで運針をすることがとても難しく時間がかかったが、練習して上達してくると、短時間でできて楽しくなった」(授業3)、「縫い目が斜めになったり、縫い目の間隔が一定でなかったりと上手いいかないことばかりだったが、終わり頃になると不思議とスムーズに気持ちよく耳ぐけをしていた」(授業6)など、各々の技能が上達したり、作業に慣れていく過程で自分の気持ちの変化に気づいていることを示すものである。また素材や浴衣を通して、あるいは道具を通して「自分に気づく」「自分の内面をみつめる」記述も見られた。「自分が着るのを想定しながら反物を選ぶ…」(授業1)、「メジャーを使って自分の身体を測る採寸は照れくさい…」(授業2)、「ハサミで布を裁つ時、何だかとてもドキドキし

てしまい、自分でも不思議…」(授業3)などである。「自分は不器用だと実感させられた」(授業9)、「私ってすごい…」(授業10)、「自分にできるかとても不安だが、和裁をやっていた祖母や母の血が自分にも流れているのだから…」(授業1)などのように、作業全体を通して自分自身の能力や適性に気づく記述もみられた。これらの記述は、授業3や授業6におけるなみ縫いや耳ぐけなどの縫い長の長い単調な繰り返し作業においても、また授業9や10における衿つけや衿先留めなどの難易度の高い単一作業においてもみられた。

(4) 授業プロンプトについての考察

経験の少ない者が被服製作を行う際の学習意欲に関するポイントは二つに大別できるとと思われる。一つは、「初めての困難な作業が理解できず、とまどい、できないのでいやになる」(授業9, 10)などの記述に見られる新奇な課題の難しさに起因するものである。もう一つは、「容易に理解でき行えるが、単調である」(授業3, 6)という記述にうかがえるように、単調作業に対するモチベーションの持続に関する問題である。学習者の多くは、それらの困難の中で自分をみつめていた。教師の授業意図を反映した授業プロンプトの提示が効を奏したと考えられる。本研究において、授業プロンプトは筆者の指導経験をもとに教授意図を読み取ることを期待して提示したものであった。そこから学習者が主体的な学びに発展させた内容は、「和服の構成・機能」「技能」「染織」「縫い目」「着装」「文化」のような対文化的学びと、「生活の見直し・文化の再認識」「消費者としての興味・行動」「性格・性別に関する認識」「達成感の感受」「計画性・危険の回避」「集中力の高まり」「協調性」のように対自己的学びがみられた。このような授業プロンプトを提示するならば、教材をひとりひとりのレベルで主体的にとらえさせることの可能性が示唆された。

4. まとめ

大学生を対象に行った浴衣製作の実習授業の中で、各授業毎に内容に応じた授業プロンプトを提

示し学習者の学びを促した。そしてその授業プロンプトや教材の意味を学習者がどのようにとらえ、その中で何を学んだかについて記述させ分析した。その結果、授業プロンプトを意識しながら被服製作活動を行わせることにより、各学習者には教師が意図した以上の学びの展開が見られ、さらに各回の授業プロンプトは製作活動全体を通して学習者の学びに重層的に影響を与えていることが示唆された。

「浴衣」教材を用いた製作実習において、授業プロンプトを提示して学びを意識させる授業をすることにより、ひとりひとりの学習者が主体的な学びを展開し、各授業毎に教材に関する理解を深め、達成感や有能感を感じながら技能を身につけていく過程が確認された。

本研究で対象とした学習者は、将来、小学校、中学校および高等学校の教師として家庭科にかかわる立場にある教育学部の学生である。したがって、興味、関心や発達段階さらには生活認識の違いから、本研究で得られた知見を小学校、中学校および高等学校の被服製作実習の指導方法に適用することには慎重でなければならない。今後は各発達段階に応じて、学習者が針、はさみ、糸、布という身近な道具や素材とじっくり向き合い、自分や自分の身体との関わりの中で適切な気づきを得、主体的にそれらを扱いたいという意欲をもつ場面を被服製作活動の中に位置づける方法をさらに追究していきたい。

謝 辞

本研究を行うに当たり、貴重なデータを提供してくれた長崎大学教育学部学生諸氏に感謝します。

引用文献

- 1) 吉井(鈴木) 明子: 家庭科衣生活領域における被服製作の取り扱いの現状と展望—家庭生活を総合的にとらえる視点から—, 広島大学教育学部紀要第2部, 第38号, 199-208, 1989.
- 2) 古田幸子・吉井(鈴木) 明子: 高等学校家庭科技術検定用教材(被服)に関する実験的考察(第1報)—教材縫製時の縫製工程分析・労働量分析—, 日本家庭科教育学会誌, 第33巻, 第1号, 39-43, 1990.
- 3) 佐藤学: 『教育方法学』岩波書店, 1999.
- 4) 伊波富久美: 家庭科教育における学習者の学び(第1報)—単衣長着製作における認知過程の分析を基に—, 日本家庭科教育学会誌, 38(1), 63-67, 1995. 同第2報, 第3報
- 5) 山本淳一・徳武知子: 発達障害児におけるワープロ・スキルの形成: 獲得条件の分析と機能的等価性の評定, 行動療法研究, 23(1), 17-27, 1997.
- 6) 松岡勝彦・菅野千晶: 発達障害児におけるレジ並び行動の形成と般化, 行動療法研究, 25(2), 25-35, 1999.
- 7) Eunice J. Giles and John K. Gilbert: Prompting in one-to-one problem-solving situations, *International Journal of Mathematical in Science and Technology*, 12(1), 125-133, 1981.
- 8) K. Denise Muth: Teachers' connection questions: Prompting students to organize text ideas, *Journal of reading*, 31(3), 254-259, 1987.
- 9) Thomas C. Ormond: The Prompt/Feedback Package in Physical Education, *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, 63(1), 64-67, 1992.
- 10) 茨山良夫: 授業分析に対する談話分析的アプローチの基礎, 福井大学教育学部紀要IV(教育科学), 42, 153-171, 1991.
- 11) 正田 良: 学級活動におけるプロンプト法—無口な時代と生きる力の育成—, 東京電機大学工学部研究報告, 人文・社会, 外国語, 保健体育系列編, 17, 27-35, 1998.

An Investigation into the Effectiveness of Instructional Prompts in Sewing Classes
—Based on an Analysis of Students' Reports on Yukata Sewing—

by

Akiko SUZUKI

Faculty of Education, Nagasaki University

The aim of this paper is to investigate the effectiveness of teachers' instructional prompts when students are doing yukata sewing. This was done by analyzing 28 students' descriptions of their interpretations of prompts and what they learned in each of 12 lessons.

A lot of students understood the teacher's intention and interpreted the prompt individually, and in detail. They acquired not only practical sewing skills and knowledge of the materials used, but also abilities which are necessary for daily life, for instance, the procedure for sewing and how to avoid dangerous situations.

In repeating dull work as well as in doing difficult independent work, a lot of students reported awareness of their internal transformation and showed insights into the relationship between what they learnt about sewing, and themselves.